

ビヨンドトゥモロー 東北未来リーダーズサミット2012報告書



2012年10月12日～10月14日

被災地の学生による東北未来マニフェスト

- 開催場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター
- 主催: 一般財団法人 教育支援グローバル基金
- 協力: ジャパン・ソサエティー
- 後援: 文部科学省

 JAPAN
SOCIETY

BEYOND
Tomorrow



BEYOND
Tomorrow

「ビヨンドトゥモロー」は、東日本大震災により被災した若者の
リーダーシップ教育支援事業です



ビヨントゥモロー 東北未来リーダーズサミット2012 概要

- 主催** 一般財団法人教育支援グローバル基金
- 協力** ジャパン・ソサエティー
- 後援** 文部科学省
- 日時** 2012年10月12日(金)～14日(日)
- 参加者** 東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島いずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち、国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生60名と、自らも岩手・宮城・福島いずれかの県で震災を体験し、ビヨントゥモローの活動に継続的に参加し、未来へ向かいそれぞれの社会的アクションを起こしている大学生15名。(選考により選出)
- 趣旨** 参加高校生、大学生の総勢75名は、様々な領域で活躍するリーダーたちによるアドバイスの下、東北の復興のあり方について10チームに分かれて政策を立案し、チーム毎に「東北未来マニフェスト」を策定しました。
震災・津波という困難を経験したからこそ、他者への共感をもって広く社会のために行動を起こすことができる人材が出てくるという信念のもとに、参加学生たちが共に逆境を乗り越えて果たすべき社会的な役割について考え、アクションに移すためのきっかけを提供しました。

メッセージ

櫻井本篤

ジャパン・ソサエティー
理事長



“自分の住んでいる場所、日本、そして世界をより良くするために何ができるのかを考えるのに早すぎるということはありません”

参加者の皆様へ

世界中の若者が、自分は何者なのか、何をしたいのか、世の中にどのように貢献をすればいいのかといった問いへの答えを探し続けています。きっと皆さんも同じように悩んでいるでしょう。しかし皆さんの場合には、予期しない震災によって人生が大きく変わってしまいました。

そんな中で私が皆さんに覚えていてほしいのは、人生の中で起きる良きこと、悪きことに対して自分なりの答えを見出し、自分の人生を歩んでほしいということです。

まだはっきりと自覚はないかもしれませんが、ビヨンドトゥモローのプログラムに参加したことで、皆さんはすでに前向きな一歩を踏み出しています。そんな皆さんのことを心より称えたいと思います。

確かに今はまだ周りの人から「若い」と言われるかもしれませんが、自分の住んでいる場所、日本、そして世界をより良くするために何ができるのかを考えるのに早すぎるということはありません。また、その思いを行動に移すのが早すぎるということもありません。

ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2012の参加者として、参加者同士だけでなく、宮城治男さん、古川元久さん、高成田亨さんといった日本のリーダーや、提言アドバイザーと東北復興の提案づくりに2日間にわたり取り組み、様々なことを学んだまたとない機会だったかと思います。これは容易なことではなかったはずですが、皆さんが才気溢れ、勇気があり、負の力を跳ね返す強靭さと強い決意を持っている証です。

ジャパン・ソサエティーは、皆さんに助言を与え、人生を導く支えを提供するビヨンドトゥモローの活動を支援することができとても嬉しく思っています。皆さんが、東北から輩出されたリーダーとして世界そして日本のために、スケールに囚われず様々な形で貢献をすると信じています。

皆さんの成長、そして将来グローバルリーダーになることを楽しみにしています。

目次

1.	メッセージ	03
2.	プログラム概要	05
	I. 参加学生紹介	07
	II. 参加学生の声	09
	III. スケジュール	13
3.	体験の共有	15
4.	東北の未来への提言	17
	I. 東北復興の専門家へのインタビューセッション	19
	II. リーダーとの対話	21
	III. 閉会式／最終提言発表	23
5.	参加頂いた方々	28
6.	メディア掲載	32
7.	協力団体	35
8.	BEYOND Tomorrowとは	36

2012年10月。震災から1年半が経過した今日、被災地から75名の若者が集結し、生きる者。故郷への想いを胸に、他県で避難生活を送る者。海外留学を果たし、東北

全員に共通しているのは、「東北の未来は、自分たちで作る」というその決意。

既にビヨントゥモローのプログラムで活躍している大学生は、自分を育ててくれた先輩に挑戦するリーダーたちは、10代のブレンたちと真剣勝負に挑みます。その空気の一瞬で、会場にいる全員のリーダーシップが問われる3日間となりました。



高校生

東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島
のいずれかの県に居住しており、震災を
乗り越えてグローバルな視野を持ち国内
外で活躍するリーダーになることを志す、
書類選考で選ばれた高校生60名

体験共有

東北未来リーダーズ

2泊3日にわたる、リーダーズサミットの機会。分野と世代を超えた議論を通じて、東北の未来のビジョン策定

サミットの目的

1. 「東北の未来への想い」を共有し、互いの志を共有する
2. 様々な領域で活躍しているリーダーとの対話を通じた、東北の未来のビジョンの具体化
3. 志を共にする仲間と、東北の未来を創る切磋琢磨の機会

仲間との出会い



生きた者の使命



しました。あの日、壊滅的な被害を受けた沿岸部で今日という日を生
 北への気持ちを世界という舞台にぶつける者。

たあの町から羽ばたこうとする後進の指導にあたります。各界で活
 の中で、高校生たちは知恵を絞る。「辛い気持ちを力に変える」という

ーズサミット

ダーシップ教育の
 えて、全員が東北
 に臨みました。

大学生

東日本大震災を岩手・宮城・福島のいずれかの県で体験し、
 ビヨンドトゥモローの活動に継続的に参加して、未来へ向かいそ
 れぞれの社会的アクションを起こしている大学生15名



の提言」策定

活躍するリーダー
 た自らの将来の
 化

提言アドバイザー

“未来の東北への提言”に向けて学生たちに
 助言を与える、様々な領域の第一線で活躍中
 のリーダーたち



中間との議論によ
 機会

リーダーとの対話



プログラム概要

参加学生紹介

東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島のいずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生60名と、自らも東日本大震災を岩手・宮城・福島のいずれかの県で体験し、ビヨンドトゥモロウの活動に継続的に参加し、未来へ向かいそれぞれの社会的アクションを起こしている大学生15名が参加しました。

高校生参加者一覧(1/2)

氏名	学校	学年	氏名	学校	学年
岩手					
阿部睦実	岩手県立山田高等学校	2	浜登夏海	岩手県立釜石高等学校	2
遠藤雅也	岩手県立金ヶ崎高等学校	2	廣野秀幸	岩手県立大船渡高等学校	2
大久保未佑	岩手県立宮古高等学校	2	藤原果奈	岩手県立山田高等学校	2
大村真奈美	岩手県立一関第一高等学校	2	藤原奈々	岩手県立高田高等学校	1
金森舞	岩手県立宮古高等学校	2	村井旬	岩手県立盛岡第三高等学校	1
坂下慶夏	岩手県立宮古高等学校	2	山崎成歩	岩手県立盛岡第四高等学校	1
島越彩香	岩手県立宮古高等学校	2	山根りん	岩手県立宮古商業高等学校	3
照井慶平	岩手県立大船渡高等学校	1	遊佐紀子	岩手県立宮古高等学校	2
宮城					
浅利友	常盤木学園高等学校	3	佐々木恵	聖ウルスラ学院英智高等学校	2
阿部さくら	宮城県石巻北高等学校	3	佐藤梓	仙台白百合学園高等学校	1
阿部征利	宮城県鹿島台商業高等学校	3	佐藤迅	宮城県農業高等学校	2
石川理那	宮城県多賀城高等学校	2	鈴木文治	宮城県仙台第一高等学校	2
太田大志	宮城県名取北高等学校	3	高橋亜弓	仙台白百合学園高等学校	3
大槻綾香	石巻市立女子高等学校	1	高橋菜都美	宮城県本吉響高等学校	2
岡田紗織	宮城県石巻好文館高等学校	3	千葉有紗	宮城県石巻北高等学校	1
尾地應忠	宮城県仙台第三高等学校	2	藤田倫平	宮城県気仙沼高等学校	2
小野竜志	宮城県石巻好文館高等学校	2	三浦亜美	宮城県気仙沼高等学校	2
亀谷菜里	仙台高等専門学校	2	三浦春香	石巻市立女子高等学校	3
雁部善幸	宮城県石巻好文館高等学校	2	三品万麻紗	宮城県立多賀城高等学校	1
木皿佳祐	東陵高等学校	3	三田諒	宮城県本吉響高等学校	2
黒田潤一郎	仙台育英学園高等学校	3	宗像健一郎	宮城県仙台第一高等学校	2
佐久間楓	石巻市立女子高等学校	3	村上あずさ	宮城県気仙沼高等学校	2
福島					
朝倉悠太	福島県立原町高等学校	1	鈴木寛仁	福島工業高等専門学校	3
遠藤奈央子	日本大学東北高等学校	3	田中有紀	福島県立好間高等学校	2
菅野英那	福島県立須賀川桐陽高等学校	3	西牧絵美	福島県立好間高等学校	2
木村元哉	福島県立いわき総合高等学校	2	橋本慧実	福島工業高等専門学校	2
阪田健太郎	福島県立湯本高等学校	3	矢代悠	福島県立双葉高等学校	2
坂本健吾	福島県立平工業高等学校	2			

プログラム概要

高校生参加者一覧(1/2)

氏名	学校	学年	氏名	学校	学年
東京(震災後に避難)					
佐々木優	東京都立城東高等学校	3			
ビヨンドトゥモロー 高校留学プログラム参加者					
有本温子	St. Timothy's School(米国)	2	小川彩加	Leelanau School(米国)	3
遠藤亮子	St. Michael's School(英国)	3	菅原彩加	Leysin American School(スイス)	2

大学生参加者一覧

氏名	在籍大学名	出身高校名
今井友理恵	慶應義塾大学法学部	盛岡第一高等学校
遠藤見倫	石巻専修大学経営学部	石巻北高等学校
小野寺栄	早稲田大学商学部	仙台育英学園高等学校
上澤知洋	東北大学農学部	盛岡第一高等学校
菊池翔太	東北学院大学法学部	大船渡高等学校
菊地将大	筑波大学社会・国際学群	高田高等学校
熊谷杏奈	宮城大学事業構想学部	泉館山高等学校
倉本知邑	明治薬科大学薬学部薬学科	盛岡第一高等学校
佐藤滉	高崎経済大学地域政策学部	盛岡第一高等学校
菅野翼	宇都宮大学国際学部	福島工業高等学校
千葉真英	宇都宮大学工学部	大船渡高等学校
福田順美	宮城大学看護学部	高田高等学校
藤田真平	神奈川大学法学部	気仙沼高等学校
マンズフィールドデビッド宥雅	早稲田大学法学部	仙台第一高等学校
目黒妃呂美	東北公益文科大学公益学部	相馬東高等学校

参加学生の声

参加学生の声を抜粋しました。



橋本 慧実
福島工業高等専門学校

今自分がやるべきことは、勉強して知識を蓄え、たくさんの事に挑戦チャレンジし、経験を積むことだと思います。今までは、まともに勉強せずにとらだら生活してきましたが、これからは、英単語一つ覚えることが人類を救うことにつながると考えて勉強します。



朝倉 悠太
福島県立原町高等学校

震災当時の生の声を聞いたのは久しぶりだったので、その頃の忘れかけていた記憶を思い出すことができました。ディスカッションをして、行動は待っていても起きないから、自分でリーダーシップをとって行動を起こさないといけない、と学んだのが印象に残りました。これからアクションを起こしていきたいと思っています。



佐久間 楓
宮城県石巻市立女子高等学校

サミットにきて悩みが解消されました。普段は震災のことはあまり触れてはいけないような感じで、そうした方が良いのか悩んでいたけどサミットで共感してもらうことができた。これからはエッセイを書くことで震災のことを伝えていくという目標があるので、伝える役目を果たしていきたいです。



三浦 亜美
宮城県気仙沼高等学校

これまでは、大人のやることだと思っていたけど、今はビヨンドで出会った、一緒にやろうって言うてくれた人達がいるから、何か行動したいです。提言アドバイザーの方や専門家の方と出会って「難しく考えなくていい」と教わってから、どんどん気持ちが強くなりました。まずは気仙沼高校のサミット参加者3人で何か立ち上げて、ボランティアやゴミ拾いなどの活動をしていきたいと思っています。



有本 温子
St. Timothy's school (米国)

留学先で震災についてプレゼンをしたときに、関心が高く質問が多くありました。知りたい人はたくさんいるのに伝える人は本当に少ないんだ、それぞれ違う経験があって、1人1人が伝えていくことが重要だと思いました。ビヨンドトゥモローの学生もそれぞれ経験が違って、60人の高校生が来ているのだから、もっと色々高校生の発言を出して、そういうところから気づきになって、いま高校生が何ができるか、発見する機会があるんじゃないかなと思っています。



坂下 慶夏
岩手県立宮古高等学校

1番衝撃だったのは「あれがほしい」って思うんじゃなくて、私達でも「自分で実現していく」ことができるんだと考え方が変わったこと。家に帰ってから、サミットの映像を何回も見えています！



山根 りん
岩手県宮古商業高等学校

どう振る舞っていいかわからなかった。いろんな経験している人がいる、一人じゃない。自分だけじゃない。一緒にがんばって、ビヨンドトゥモローに参加してよかった。自分の意見に縛られないためにサミットに来てみんなの意見がきけてよかった。



木村 元哉
福島県いわき総合高等学校

心の持ちようが大きく変わりました。将来のビジョンを具体的に描けていなかったけど、提言アドバイザーの方や他県の学生と話して吸収することができて、具体的になりました。あのスケジュールの中でやったことへの自信もつきました。3県のそれぞれの学生から話を聞いて、県によってそれぞれ課題が違って、現地ではわからないことが多いと改めて感じました。そしてまずは将来への第一歩として、生徒会長に立候補することにしました。



木皿佳祐
宮城県東陵高等学校

今まで震災のことは人と話さないようにしていた。今回先生にサミットを紹介されて初めはあまり興味はなかったけれど、こういう機会は今後はないかなって思って、参加することにした。参加して、今回みんなと体験を共有することができて、自分が一番つらいって思っていたけど、自分より大変な人がいくらでもいるんだと思いました。



菅原彩加
Leysin American school(スイス)

地域で小さい子がとても亡くなったので、やっぱり私が活動できるから未来のあった子たちの分も一生懸命生きたいと思ったし、そういうのもいるんなりに知って欲しかった。

上澤知洋
東北大学農学部



去年サミットに参加して、その時自分は震災のことをわかっていなかったけれど、みんなの話をきいてその時の様子がよくわかり、家に帰って号泣した。もっと自分にできることはないかと考えた。今年のサミットはチームリーダーとして参加して、震災を伝える大切さを知ってほしいと思うし、自分ができるところを見つけていきたい。

菊池翔太
東北学院大学法学部



どうすれば高校生の意見が出るのか、チームを引っ張っていくためにどこまで自分が発言していいか悩んだ。高校生たちにとってサミットが良い場になって欲しかった。

悩みながら過ごした3日間が終わり、サミットだけの繋がりになるのかと思っていたけど、サミット終了後もみんなから連絡がくるなど絆を大切にしている。



高橋亜弓
宮城県仙台白百合高等学校

明日は校長先生にビヨンドの報告をしに行きます。沢山の学んだこと・感じたこと、全部ちゃんと伝えられるかな...それからactionとinitiativeを早速実行しようと思っています。

校長先生へのビヨンドの報告書(兼企画書)書き終わりました。書いて言われた訳じゃないけど、伝えたいことが多すぎて。企画通るか分からないけど、やらなきゃ始まんないね。久しぶりにこの充実感！これからこの3日間のことを行動にいかしていきます！



菅野翼
宇都宮大学国際学部

高校生が意見を発信するために、自分がどこまで発言していいかを悩みながら進めた。言いすぎても高校生たちの考えにならないし、発言しなくてもまとまらない。去年は自分が参加者だったが、今年はチームリーダーとして参加し、チームをまとめる難しさを感じた。チームをどうサポートしていくかを悩みながら過ごした3日間だった。



藤田真平
神奈川大学法学部

前回のこのサミットがあるまで僕は震災の日をただ震災の日と思っていた。ビヨンドトモローに出会わなければ、忘れようとして過ごしていたかもしれない。

サミットがあって、今この場に並んでいる仲間と合うことができ、そして自分の将来に対して、サポートしていただき、今現在明確な目標に向かって歩いて行っている。震災に対して前向きになれた。ただの震災で終わらせないために自分ができていることをしていきたい。

プログラム概要

スケジュール

10月12日(金)

20:30

オリンピックセンター到着

20:45~21:55

オリエンテーション

10月13日(土)

7:00~ 8:00

朝食会

8:40~ 9:30

3.11とビヨンドトゥモロー

9:30~10:00

合唱練習

10:00~10:30

課題発表

10:30~12:00

体験共有

12:00~12:50

昼食会

12:50~13:35

(ディスカッション)現地のニーズ理解・課題の抽出

13:35~14:00

インタビュー準備

14:00~15:00

専門家インタビュー - 講師:

多田一彦 特定非営利活動法人 遠野まごころネット 理事長

西川智 独立行政法人水資源機構 監査室長

宮城治男 NPO法人ETIC. 代表理事

15:30~16:30

(ディスカッション)プレゼンテーション内容仮案作成

16:30~17:00

中間発表会

17:00~18:30

(ディスカッション)最終プレゼンテーションのブラッシュアップ

19:30~21:30

フェアウェルディナー

10月14日(日)

8:30~ 9:00

合唱練習

9:00~ 10:00

提言発表練習

11:00~ 13:00

閉会式/提言発表会

13:00~ 14:30

フェアウェルランチ









体験の共有

2011年3月11日、何が起こったのか。

震災で何を失い、何を得たのか。

震災から1年半が経つ今まで、「私」にどのような変化があったのか。

参加者は自分の言葉で、3月11日を語り、そして、真摯に仲間の話に耳を傾けました。

震災で繋がった新たな出会い。

参加学生は互いの体験を共有することで、絆を深めました。

菊地将大
筑波大学 社会・国際学群
(岩手県立高田高等学校卒業)



“これまでのビヨンドトゥモローのプログラムで、若者がリーダーシップを発揮することの大切さを学びました。私たち若者は被災地の未来を担う存在です”

震災当時私は、陸前高田市という街に住んでいました。岩手県の沿岸南部に位置する、小さな田舎街です。3月11日、大地震と津波が街を襲いました。私は津波警報のサイレンが鳴ってすぐ、高台へと足を運びました。そこから見えたのは街の崩壊でした。

私の街には、海辺に防潮林として数万本の松が植えられていました。白い砂浜と青々とした松の対比で、とても美しい景観でした。しかし津波はたった1本の松だけを残して、全てなぎ倒してしまいました。その時の光景は忘れることができません。小さい頃からたくさんの思い出を作ってきた場所だっただけに、やけに切なく、虚しい思いでした。のちに、砂浜も地盤沈下によって海に侵食されました。地元の誇りであった美しい景観は、今はもう見ることはできません。

防潮林を越えた後、津波は街を次々に飲み込んで行きました。そして次第に街は煙となった砂に覆われ、最早呆然としているしかありませんでした。それから私は急いで自宅へ向かいました。自宅は割りと高台の方に位置していましたが、もしかしたら津波に飲み込まれているかもしれないと、焦燥感で一杯でした。自宅へ着くと、近くまで津波が迫っていたようで、自宅の前に瓦礫が積み重なっていました。幸い自宅は無事でした。出かけていた祖母も無事に帰ってきていました。しかしいつまで経っても、両親が帰って来ることはありませんでした。

結局、私の街の犠牲者は約1800人にも及びました。その中には私の両親も含まれています。私は祖母と、両親を探すため、何箇所もの遺体安置所を訪れました。私は遺体を見るのが嫌で、あまり乗り気ではありませんでしたが、家族に発見されることもなく、ただ身体を腐らせていくかもしれない両親を思うと、やはり向かわずにはいられませんでした。

遺体安置所には所狭しと、無数の遺体が並べられていました。そのどれもがあざで赤黒く、海水を吸って膨れていました。そんな痛ましい光景を、毎日のように目にしました。「彼らは一体どの様な思いで死んでいったのだろう。」いつもそんな事を考えていました。

何度通ってもなかなか両親は見つからず、半ば諦めかけていました。しかし、震災から2週間あまりが過ぎた3月の終わり頃、遂に発見することができました。遺体となった両親の姿を見た時、いよいよ死が現実のものとなり、深い悲しみに襲われました。それまでは一度も泣くこともなく、両親の死を仕方のないものだと思ひ込み、平然と暮らしていました。それゆえ、その分悲しみは溢れ、涙が止まりませんでした。しかし、悲しみにくれる余裕などありませんでした。家に残された祖母と2人きりでの、過酷な生活が待っていたからです。

そんな状況の中、日本だけでなく世界各国からの援助がありました。それは支援物資であったり、瓦礫の撤去であったりと様々で、その支えのおかげで私たちは今日を生きることができています。

現在、街は少しずつ復興へと向かっています。しかし、未だたくさんの課題が残っているのも事実です。例えば、雇用の問題です。震災によって多くの人が職場を失い、経済的困難に陥っています。友人の母はそれが原因で自ら命を断ちました。津波で死んでしまうことよりも、はるかに辛く、悔しいことではないかと思えます。こんな状況を打開しなくては、被災地の将来は暗いまです。

私はこれまでのビヨンドトゥモローのプログラムで、若者がリーダーシップを発揮することの大切さを学びました。私たち若者は被災地の未来を担う存在です。だからこそ私達が先頭に立ち、強いリーダーシップを発揮していく必要があると思います。

遠藤見倫
石巻専修大学経済学部
(宮城県石巻北高等学校卒業)

“3月11日。まだ寒さの続く中、
私は全てを失いました”



石巻市から来ました、遠藤見倫です。

3月11日。まだ寒さの続く中、私は全てを失いました。

住み慣れた町。幼少から育った家。そして最愛の父。津波は一瞬で全てを奪っていききました。

津波の前、父に電話をかけると、奇跡的に電話がつながりました。父は、これから家に帰るところだと言い、受話器越しに車のエンジンをかける音が聞こえました。これが父との最後の会話になりました。

高台に避難した私の目の前で、私の家は、流されていきました。町中を黒い水がつつみ、町中から助けてという声が聞こえました。その時、私は何もできませんでした。無力な自分を感じました。

私は一人娘で、ずっとお父さんっ子として育ちました。父の死を受け入れることが出来ず、父の遺体が見つかるまでの間、毎日、父の携帯に電話をかけました。誰も出ないのはわかってはいたけれど、毎回、恐怖の中で電話をかけ、誰も出ないことを確かめて電話を置いては泣きました。

復興、復興、といわれても、私の心は立ち止まったままでした。強くなりたくて、自分の中で何が強いのかかわからず、でも強くなりたくて、どうすればいいのかわからない日が続きました。

そんな時、私は、ビヨンドトゥモローに出会いました。何が出来るかわからない時、何が出来るかを考える場に出会いました。それまでずっと孤独でしたが、ビヨンドトゥモローで一生の仲間と最高の時間を共有し、絆が生まれ、仲間が出来ました。

震災から1年が経った日、私は自分に約束しました。「人との想いを共有して、その人の夢を応援できる人になる。私が絶望的だった時、助けてくれたのは人とのつながりだったからこそ、自分が多くの人と関わり、一人でも役に立てられるように、様々なことにチャレンジして、また1年後、成長できた自分に出会う」と。

この夏、アメリカに行ったことで、私には、ジャーナリストになり、人と人を言葉でつなぐ役割を果たしたいと考えるようになりました。この新しい夢を叶えることで、私は、誇りに思っている父が生きていたという証になりたいと思います。

“過去は今を変えられないけれど、
今は未来を輝かしいものにできる
可能性を秘めている”

過去は今を変えられないけれど、今は未来を輝かしいものにできる可能性を秘めている。震災を通して、人と繋がり、行動した私が得た想いであり、未来に伝えたいことです。

私はその力を養うため、ビヨンドトゥモローを通じて幾つもの経験をしました。今年の8月には古川大臣室に短期インターンシップへ行きました。やはり大臣室というだけあり、リーダーシップ育成にはうってつけの場で、国を背負って立つ者の職務に関わることで、その重要さや大変さがよく分かりました。このインターンから、私は周りを巻き込んで行動することの重要さや、若者に影響を与えるのは若者であるということなどを学びました。この収穫は、これからアクションを起こす上での大きな手がかりになるでしょう。

私は将来、被災地の未来を支える存在になりたいと思っています。一体どんな職業なら、そうなり得るのでしょうか。私は今、行政や経営に興味を持っていますが、これらは正解にあたるのでしょうか。

私は最近、職業や立場に固執することをやめました。職業はあくまで手段であり、重要なのは自分が何をしたいかということです。今は漠然と被災地を支えたいと思う私ですが、より具体性を持った、本当に自分のしたい何かを探し当てたいです。そしてサミットに参加してくれた高校生の皆さんには、まさにその「自分が何をしたいか」ということを、プログラムを通して考えていって欲しいと思います。

東北の未来への 提言

プログラム2日目の朝、提言の課題が発表されました。

「東北未来マニフェストの策定」

皆さんは、若者による政党の幹部です。
 政党の幹部として、選挙に勝つため、東北の復興に役立つ政策について考え抜いて下さい。
 被災地のリアリティを知っている皆さんだからこそ作ることができる。
 東北と、そして日本の未来を担う若者である皆さんだからこそ描ける。
 そんなマニフェストを作り、各界のリーダー、
 そして未来のリーダー候補による総選挙を行います。
 テーマは以下の3つ。チームごとに課題が課されました。

- **アントレプレナーシップ(起業・事業創造)による東北復興**
 より元気で、より魅力的な東北の復興に向けて、新たなビジネスや求められるNPO等の立ち上げを促進し、東北でこそ起業したくなる、事業を立ちあげたくなるような政策の提示
- **世界に誇れる防災・安全なまちづくり**
 東日本大震災という悲劇を乗り越える中で得た知恵や経験を活かし、地震や津波などの災害に強く、住民が安心して住むことの出来る安全なまちを作るための政策の提示
- **観光による魅力ある東北の復興**
 日本国内から、そして世界から。東北の魅力を再発掘し、新たな名物を創り出し、安心して観光できることを示し、観光を通して魅力ある東北を復興する政策の提示

プレゼンテーションのルール

1. 政党の名称を記すこと
2. ネクスト内閣のメンバーと役割を決めること
3. マニフェストの内容を一言で表すキャッチフレーズを入れること



東北の未来への 提言

ステップ① 現地の声・ニーズの理解

参加学生は、東北未来マニフェスト策定に向け、現地のニーズを把握することから始めました。東北で何が求められているのか、本当に必要な政策とは何か。

事前に周囲にいる2人にインタビュー調査を実施した参加学生たちは、その結果をチーム内で共有し、議論を深めました。

参加学生は、これらの現地の声と自らの体験を元に、震災から1年半が経つ今、東北被災地で何が求められているのか議論しました。

共有された現地の声 (抜粋)

- ハローワークには様々な求人が出ているのに申込みがない現状がある。どうしたら企業と求職者がマッチするかは課題だと思うし、さらに地元はどう仕事を生み出すかも課題。また、精神的ショックもあるが、失業保険の延長による仕事の意欲低下も懸念される。人のために働くという意識を持つことによって自らの存在価値が認識され、自立につながる。仕事を生み出すことの前に意識を変える必要がある。
- 漁業関係では、船やいかだが流され捕獲量も減り1からのスタートとなり、今では後継者が少ない。一つの町だけでは限界があるので、他の県、地域との連携が必要になる。漁業を立て直すには少なくとも3年はかかるそうだ。
- 仮設住宅に住んでいる人たちの住む場所や仕事がないことが課題。現在3年間までは仮設住宅に住むことができ、そのあとは災害住宅に住むか、新しい家を高位置に建てるようになるため、今まで住んでいたところに住めなくなる。現状では、それぞれの家を建てるにしても、仕事もないためお金もなく、高齢者には家を建てるのが難しい。取り残されていく人たちは焦りを感じている。
- 若い人たちは家や新しい仕事を探しに引っ越したりしてしまうために、高齢者が増え少子高齢化になりつつある。仮設住宅で1人暮らしをしている高齢者にとっては、コミュニケーション不足によるQOLの低下も課題。
- 福島県では、避難を余儀なくされた町の役場機能との設置場所と多くの町民の避難場所が異なっていて、地域コミュニティが壊れてしまった。役場の方も努力して支店を構えるなどの対策をとっているが、コミュニティが離れてしまった以上、全町民と連絡を取るのが難しい現状がある。
- 食産業の盛り上げが課題。小さな子供がいる親は、福島の食べ物怖いなそう。今まで食べていたものも、突然報道されたりする。福島県産が怖くて食べられなくなると、県の農産業が衰退し、県の経済面が成り立たず、破産で命を落としたりする人も出てくる。
- 看護師が少ないだけでなく、設備の整った病院がないことが課題となっている。設備が整った病院がないことで、緊急の患者が出た場合、1時間近くかけて違う地域へ行かなければならない。
- 制度の決定が遅く、目先の解決を先決している。1年半が過ぎ、将来的な街のビジョンが求められる中、町全体としての決定や動きが見られず、町民の不安は大きくなる一方である。
- 行政と被災地との意思疎通が図れていない。例として、沿岸部の問題となっている防潮堤の計画では、地元では反対の声があがっているにも関わらず、行政は予算がないから今しかできないとっており、意思がかみ合っていないことが挙げられる。



東北の未来への提言

ステップ② 東北復興の専門家へ

ステップ② 東北復興の専門家へのインタビューセッション

自らの体験や、現地の声から明らかになった被災地での課題。これらの課題を解決するべく必要な施策とは何か。

東北の復興を考える上で、各分野の第一人者から必要なインプットを頂きました。アントレプレナーシップ、観光と地域活性化、そして災害予防とまちづくり。

テーマA

アントレプレナーシップ(起業・事業創造)による東北復興

“政治・行政が遅いという人はいる。しかし、仮に行政が機能して、お金の配分がうまくできたとしても、自分たちが生きていることに意味を見出せない大人は元気にならない。生きがいを作ることによって彼らは元気になる。あなたたち高校生は、奇跡を起こすことができる”



宮城 治男
NPO法人 ETIC. 代表理事

1972 年生まれ。早稲田大学在学中の 93 年、学生起業家の全国ネットワーク「ETIC. 学生アントレプレナー連絡会議」を創設、事務局長に就任。全国の大学生に対し、啓蒙活動に取り組む他、ベンチャー企業のスタートアップ等を支援する。その後 NPO 事業を拡大し、組織名称を ETIC. に変更、2000 年には特定非営利活動法人化、代表理事に就任。次世代の起業家、リーダーの輩出へ向けて、大学生に対してのキャリアデザイン支援事業やベンチャー企業、NPO 等へのインターンシップ事業、大学・学校教育のキャリア教育改革等の事業に取り組む。



テーマC

観光による魅力ある東北の復興

“全てが失われた今、これを最大のチャンスと考える新しいことに取り組んでいくしかない。やらなければよかった失敗なんてない。やってよかったという失敗はたくさんある”



のインタビューセッション

学生たちは、専門家にぶつける質問を事前に話し合い、それぞれの分野の核心に迫りました。学生からの鋭い質問と、それらに答える専門家。将来の東北のリーダーと専門家との真剣勝負がそこにはありました。

東北の復興において第一線で活躍される専門家をお呼びして、専門家的見地から最新の状況や真の課題について、参加学生自身がインタビューを実施しました。

テーマB
世界に誇れる防災・安全なまちづくり

“安全なまちづくりのためには何が必要か。「～すべきだ」と言う理念を言う人はたくさんいる。問題なのは、誰が決めるのか、将来像をどう描くのか、決めた将来像をどう地域の住民に納得させるのか。皆さんが直面しているのは現実です”



西川 智
独立行政法人 水資源機構 監査室長

神奈川県出身、東京大学工学部で都市計画を勉強し、大学院修士課程を修了して国土庁(当時)に入る。国土計画や名古屋大都市圏の計画の仕事をしたあと、アメリカMITの客員研究員。1989年から国土庁防災局で企業防災や国際防災協力の仕事を始める。1992年-95年国連人道問題局災害救済調整部で国際緊急援助を担当。帰国後、東京都に出向して長期計画を担当。霞ヶ関に戻り、水資源計画や中央省庁再編の仕事をした後、アジア防災センター所長、内閣府防災の参事官として2004年10月の新潟県中越地震や2004年12月のインド洋津波に対応、2005年の国連防災世界会議をとりまとめる。工学博士。2009年から世界経済フォーラムの有識者会議に参加。特技は、世界中のどんなお料理もおいしく食べること。

多田 一彦
特定非営利活動法人 遠野まごころネット 理事長

昭和33年生まれ。昭和56年、青山学院大学法学部卒業。遠野市役所、開発コンサルタント会社を経て、昭和63年に開発コンサルタント会社を設立。その後行政書士多田事務所を開所。平成20年、柏木平レイクリゾート株式会社取締役役に就任。平成21年、同代表取締役役に就任。平成23年3月の東日本大震災発生直後、任意団体遠野まごころネットの結成に参画。同年7月、同団体が特定非営利活動法人の認証を受けるのに伴い、理事に就任。同年12月、理事長に就任。現在に至る。



東北の未来への
提言

ステップ③ リーダーとの対話

ステップ③ リーダーとの対話

様々な分野で活躍されているリーダーをお招きし、キャリアや、どのように社会に貢献していくべきかなどについてメッセージを頂きました。各界で活躍されているゲストとの対話は、学生の視野を広げ、未来のリーダーとなるための大きな一歩となりました。



“あなたたちのような若者の存在があるからこそ、東北の将来を心配することはないと言いたい。東北の未来は、あなたたちにかかっているのです”

ジョン・V・ルース
駐日米国大使



櫻井本篤
ジャパン・ソサエティー 理事長

“ひとつ皆さんに訴えたいことは、これから皆さん色々な局面で自分の道を選択するということがあると思います。その時にできるだけ自分の視野を広げることができるかどうか、世の中のために意義があるかどうかという観点から、よりチャレンジングな、難しい方向を選んでください。失敗しても必ず機会は訪れます。そういう意味で、難しいチャレンジングな仕事に進んで下さい”



“行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたる例なし。大昔の日本の文化に書いてあるように、みなさんが使命感をもとにした新しい発明をしなさい。要約しますと、まず障害物があって、障害物を乗り越え修行して、修行してから使命感が生まれます。”

ロバート・アラン・フェルドマン
モルガン・スタンレーMUFGB証券株式会社
マネージングディレクター

“いろんな時に役に立つのは人の輪、ネットワークです。いろんなこの引き出しをだしたらどんなことがでてくるかな。そういうことがいろんな知恵をだす時に役に立ちます。そういう意味でみなさん今までとは違う新しいネットワーク、人の輪というところに加わるこのチャンスを大いに活かして下さい”



高成田 享
特定非営利法人 東日本大震災子ども未来基金 理事長



閉会式／
提言発表会

最終提言発表

75名の参加学生は、自分たちが創る東北の未来へのマニフェストのために、3日間知恵を出し合い、意見をぶつけ合い、そして東北復興に求められる政策を立案しました。現地のニーズに即した学生ならではの発想にあふれた提言発表会は、未来への希望に包まれました。

学生が当事者の東北復興。

会場内にいる全員が、各チームによって発表されたマニフェストを吟味し、東北の未来を形作る1票を投じました。



講評

川島瑠璃

ジャパンソサエティー 東京事務所 東京代表

“ビヨンドトゥモローがロールモデルとなって広がったら、日本は変わるんじゃないかなと思いました。歩き出さないと何も起こらないのだから、足を進めて下さい。そして、あなたたちには大勢のサポーターがいることを忘れないでください”

最終提言発表内容 最優秀チーム

テーマ

OK 大きな)(希望)(東北)党

3人区3

テーマ「観光・地域活性化による復興」

- ・観光客増・観光客増・山形県心・青森県心
- ・観光客増・観光客増・上田県心
- ・観光客増・観光客増・松本県心

ネクスト内閣

内閣のメンバーと役割

- ・観光客増・観光客増・山形県心
- ・観光客増・観光客増・上田県心
- ・観光客増・観光客増・松本県心

課題の抽出

観光客増・観光客増・山形県心

観光客増・観光客増・上田県心

観光客増・観光客増・松本県心

⇒被災地内外の**交流**が必要！



プレゼンテーションのルール

1. 政党の名称を記すこと
2. ネクスト内閣のメンバーと役割を決めること
3. マニフェストの内容を一言で表すキャッチフレーズを入れること



会場内全員が1人1票投票する選挙形式

投票基準

1. 現地のニーズ
東北のニーズに根付いているか？本当に求められている政策か？
2. 高校生としてのオリジナリティ
高校生だからこそ実現出来る政策になっているか？
3. 具体性・実現可能性
具体性はあるか？絵に描いた餅にならないか？
4. 中長期のインパクト
中長期的な東北復興へのインパクトの大きさは？
5. プレゼンテーション
プレゼンテーションは有権者に伝わる考え抜かれたものだったか？

政策 (1/2)

「東北」を「日本」として、高1の高校生が東北の現状を踏まえ、東北の復興に貢献する。

日本全国 ↔ 東北地域

交流

- ① 観光
- ② 被災地域の見学
- ③ 両世代との交流
- ④ 議論(復興・防災について)
- ⑤ ②③④併行、ボランティア

政策 (2/2)

「逆BT」プログラムとは？

小学生	中学生	高校生
高齢者との交流	選挙体験	専門家講話
ボランティア活動		
被災地・非被災の両世代での交流	両世代での議論	
手作り土産作り		

有権者との約束

0(大きな)K(希望)J(東北)党は、逆BTを教育機関として、実現します

被災地の高校生は選挙権のない。選挙権年齢は18歳に引き下げ、約300万人が選挙権を得る。

雇用促進
就職支援
土産振興

企業、経済活性化

「目標は一層にしよう、目標は一層にしよう」



閉会式／
提言発表会

学生代表スピーチ

“3月11日というあの日があったら、私は今日という日を夢を持って生きていたのだろうか”

小川彩加です。岩手県釜石市から来ました。

震災で私は家族全員を失いました。両親・姉・祖母がなくなり17年間暮らした家も失いました。これ以上失うものはないというくらい私はすべてを失いました。

3月11日地震の直後、私は母と祖母と高台に避難しました。しかし、黒い壁のような波は私たちのすぐ背後に迫っていました。その時、母が言った「津波だ」という言葉が、私が最後に聞いた母の言葉となりました。

走って坂を上り山を登り私は助かりました。でも、どこを探しても母と祖母の姿はありませんでした。翌日の朝、がれきの上を母と祖母の名前を呼びながら探しました。木にささったおばあさんを見たときは震えが止まりませんでした。あの時見たあの悲惨な光景は今でも私の頭から離れません。

“これ以上失うものはないというくらい私はすべてを失いました”

数日後、姉がなくなったこと父が行方不明であることを知らされました。遺体安置所で姉と対面したとき、姉の頬を触り何度もありがとうと言いました。私の涙で冷くなった姉の頬は濡れました。もしかしたら目を覚ましてくれるんじゃないか、そう思いました。姉から離れたくありませんでしたが、火葬して姉は灰になってしまいました。

そして行方不明の家族を探す日々が続きました。亡くなった人の写真がおさめられているファイルを一枚一枚めくって探しました。1ページ1ページめくる度に衝撃が走りました。まだ幼い女の子、手足が曲がったままの遺体、私はたくさんの遺体を見ました。

もし次のページが父だったら。母だったら。

早く見つけてあげたいけれど、事実を受けれる事が出来ず、ページをめくる事に途方もない恐怖を感じました。

その後、父と祖母は見つかりましたが、母と祖父は今も行方不明です。

たった一瞬にしてあまりにも多くのものを失い、なぜ自分だけが助かったのかと心も魂もどこかにいってしまった気持ちでした。震災直後はぼんやりと、高校を卒業したらどこかで働くのだからと思っていました。けれど、震災の後にたくさんの方々に出会い、世界が広がり、人と人とのつながりの素晴らしさを知り、そしてその過程で芽生えたアメリカへの留学は劇的なスピードで実現し、今年の6月から、ミシガン州の高校に留学しています。

ルース大使、ビヨントゥモロー、他にもたくさんの、本当にたくさんの方々の支えで多くのチャンスや機会を得ることが出来ました。

チャンスは誰にでもあるわけではありません。私はあの日、死んでもおかしくありませんでした。でもこうして今ここに生きています。生かされています。

多くのものを失いましたが、多くのものを得ることができました。今の私に正直怖いものはもうありません。あのような体験をした私だからこそできる事があります。あの時の苦しみを思い出せば、なんだったってすることができます。生きたくても生きれなかった人々がたくさんいる中、私は生きています。

人は助け合い、支えあい、思いやりながら生きていくのだと改めて実感しました。私がたくさんの方々からきっかけやチャンスをいただいたように、私も誰かにきっかけやチャンスを与える側に人間になりたいと思っています。

過去は過去でもう戻ることできません。でもこれからの自分の将来は変えることができるのです。当たり前のことですが、私にとってとても重みのある言葉です。時間は誰にでも平等です。だったらたくさんのことをしよう、そう思います。

将来はファッションデザイナーとして活躍し、世界に貢献できる人間になりたいと思います。そして単純な言葉ですが、“幸せになる”これが私ができる唯一の親孝行です。

きっと私は今までたくさんの人にかわいそうな子だと思われてきたでしょう。悔しいです。このような悔しさも私の原動力となっているでしょう。震災はもちろんの方がよかったけれど、辛い体験があって、今の自分があるとも思います。震災後にたくさんのお出会いと劇的な人生の変化があり、今思うと、震災前の日々が、震災の後の人生のために存在していたような気がします。3月11日というあの日があったら、私は今日という日を夢を持って生きていたのだろうかと自問します。

姉はいつも弱い立場にある人のために行動する人でした。父からは、思いやりを持って人と接することを学びました。母からは強く生きることを教わりました。3月11日あの日から家族を思わなかった日は一日もありません。

家族が私に残してくれた思いや意思を胸に、与えられたチャンスを大切に、自分の可能性を信じ、そして何よりも自分の気持ちに素直に生きていきたいと思っています。

小川彩加
Leelanau School
(米国 高校留学プログラム参加)





木皿佳祐
東陵高等学校(宮城県)

“陸では自衛隊が、海では海上保安庁が必死で捜索をしてくれていました。私は、その姿を見て自分も海上保安官に絶対になりたいと思いました”

2011年3月11日、東日本大震災が発生し、東北地方、関東地方の太平洋沿岸を襲いました。私の故郷である、宮城県南三陸町も大きな被害を受けました。その日私は、幸いにも学校にいたため、私の身が津波の被害にあうことはありませんでした。私の家も、昔から家まで津波は来ないと聞かされて育ってきたので、あまり心配はしていませんでした。

しかし1週間後、迎えに来た母から2つの事実を聞かされました。1つは家が流されたということ、1つは、まだ父が帰ってきていないとのことでした。その日、父が避難していることを信じて、避難所を探しました。しかし、どこにもいませんでした。最後に、名前がないことを祈りながらも遺体安置場を探しました。結局名前は無く、どこか安心しましたことを覚えています。

しかしその後も、父親は一向に帰ってきませんでした。そして、震災から1ヶ月たった4月11日、母から遺体安置場で父親を見つけたとの連絡が入りました。信じることはできませんでした。次の日、私も遺体の確認へ行きました。そこには、変わり果てた父親の姿がありました。そんな父親を見た瞬間、やり場のない怒りと絶望感が私を襲いました。それからは、絶望感だけで先のことなど何も考えることが出来ませんでした。そんな人々が絶望に暮れる中でも、陸では自衛隊が、海では海上保安庁が必死で捜索をしてくれていました。私は、その姿を見て自分も海上保安官に絶対になりたいと思いました。

学校が始まり、私は生徒会長になりました。学校にも、国内外からたくさんの支援を頂き、私達は1人ではない、と思うことができました。多くの人々の支援のお陰で、私も前を向こうと思うことが出来ました。この東日本大震災で、沢山の人が亡くなったり行方不明となられたりしました。私が今生きている今日という日は、亡くなられた方々が生きたかった今日でもあります。亡くなられた日々分まで精一杯、今日の日を生きることが、私達、生かされた人間の使命だと思っています。

その使命を全うすべく、私は今日も精一杯生きていきます。



菅原彩加
Leysin American School
(スイス 高校留学プログラム参加)

宮城県石巻市から来ました、菅原彩加です。今年の春から、ビヨンドトゥモローの高校留学プログラムで、スイスのレザン・アメリカンスクールに留学しています。1年前、震災から6か月後に初めて開催された東北未来リーダーズサミットの閉会式で、私は自分の体験を話しました。そして、私の話をきいて、手をさしのべてくれた多くの方々の支えで、私は今年の春から、スイスに留学することができました。

2011年3月11日、私は家にいた母と共に、津波に流されました。しばらく流されてがれきをかきわけて出ていくと、がれきの下から母が私の名前を呼ぶ声が聞こえました。がれきをよけると、くぎと木がささり、足は折れ、変わり果てた母の姿がありました。右足がはさまって抜けず、一生懸命がれきをよけようと頑張りましたが、私一人ではどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母のことを助けたいけれど、このままここにいたらまた流されて死んでしまう。助けるか、逃げるか。私は自分の命を選びました。今思い出しても涙の止まらない選択です。最後その場を離れる時、母に何度も「ありがとう」「大好きだよ」と伝えました。「行かないで」という母を置いてきたことは本当につらかったし、もっともつと伝えたいこともたくさんあったし、これ以上つらいことはないのではないかなと思います。その後私は泳いで小学校へと渡り一夜を明かしました。

“家族を思って泣いた日も数えきれない”

この後も私が体験したつらいことはもっともつとたくさんあります。辛くて死のうかと思った日もありました。なんで私だけと思った日もあるし、家族を思って泣いた日も数えきれないほどありました。震災で私ははかりしれないほど多くを失いました。

しかし、この震災によって得られたものもたくさんあります。

私は、このビヨンドトゥモローに参加して以来、たくさんの仲間、チャンスを得ました。私が1年間ここで出会った仲間は学校でも家でも話せないような、震災の話、悩み相談、時にはたわいもない話、どんなことも話すことができます。また、ビヨンドトゥモローでの友達は私にとって家族、姉妹のような存在です。本当にみんなのことが大好きで、留学している今も、何かあればみんなに連絡をするし、いつもみんなに会いたいなあと考えます。

次に私は、ビヨンドトゥモローで大きなチャンスを得ました。去年の9月から私は、今まで想像もできなかったようなたくさんの経験をしました。ダボス会議参加や米国プログラム、そして今の高校留学とどれも本当に私にとって大きく、それは私の大きな支えです。私にとってこのチャンスは、大きな力や頑張る目的を与えてくれました。

私は、去年ここで、つらいことがあったからこそこんな自分になれたと思える日が来るように前を向いてしっかり頑張りたいと作文を読みました。この1年間を振り返ると、しっかり前を向き歩いているのではないかなと思います。そして、今回2回目の東北未来リーダーズサミットに参加をし、新たな仲間と出会い、また、去年の仲間とも再会し、これからも頑張っていかなければいけないという意味を再確認できました。

“この1年間を振り返ると、しっかり前を向き歩いているのではないかなと思います”



山根りん
宮古商業高等学校(岩手県)

私は岩手県宮古市という沿岸の町に住んでいます。学校や家からも海が見えるほど海が身近なこの町で私は育ちました。

あの3月11日、地震が起きた時、ソフトボール部のキャプテンの私は、高総体に向けて、グラウンドで練習をしていました。地震の直後、学校に迎えに来てくれた母と一緒に、私は帰宅しようとしたのですが、その途中で、津波に遭遇しました。大きな黒い津波に飲まれ、私は奇跡的に助かりましたが、母は亡くなりました。

私は、母を助けてあげられなかった、親孝行も出来なかったというたくさんの後悔をし、すぐに現実を受け入れることができませんでした。しかし、残された家族や友人・知人たちに支えられ、立ち直り、私は前に向かって歩くことができます。

“母を助けてあげられなかった、親孝行も出来なかったというたくさんの後悔”

未だに深い悲しみを抱えている人はいると思いますが、生きているのだから歩みを止めてはならないと思います。仮設住宅に一人で住んでいる老人がいるならば、まず外に出てみることを、学生なら夢を持って自分の人生を歩むことなど、被災者には生き残った者としての使命があると考えます。今生きている私たちは、使命を果たすという気持ちと前に向かって歩み続けるということが、亡くなった方への恩返しであり、生きる希望となるのです。

“私の使命は、自らの経験や日本の防災について伝えていくこと”

私の使命は、自らの経験や日本の防災について伝えていくことだと考えています。将来はインドネシアのスマトラ島やハイチなどの津波や天災の被害にあった国で、日本政府やNGO・NPOの職員として働きたいという夢があります。東日本大震災をうけ、研究が進められたことで非常に高いレベルまで達している日本の防災への取り組みを伝えていきたいのです。スマトラ島やハイチでは、財政難ということでいまだに復興再建への活動が滞っていると知りました。ですから、私は、日本や他の国との連携を図りながら、途上国の防災への取り組みに財政支援を促す役割を担うなど、あらゆる方面で貢献できる人材になりたいと思います。

今を自分らしく生き、自分が決めた道を突き進むことが、母にできなかった親孝行であり、恩返しです。



宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

参加頂いた方々

提言アドバイザー(1/4)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と思いの共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム2
岩瀬 大輔
ライフネット生命保険株式会社
代表取締役副社長

1976年埼玉県に生まれ、幼少期をイギリスで過ごす。1998年、東京大学法学部を卒業後、ポストン・コンサルティング・グループ、リップルウッド・ジャパンを経て、ハーバード経営大学院に留学。同校を上位5%の成績で卒業(ベイカー・スカラー)。2006年、ライフネット生命保険の設立に参画。2009年2月より現職。世界経済フォーラム(ダボス会議)「ヤング・グローバル・リーダーズ2010」選出。日経ビジネス「チェンジメーカー・オブザイヤー 2010」受賞



チーム1
立花 貴
(株)四縁 代表取締役、
(社)Sweet Treat 311代表理事、
(社)東の食の会 理事、
(株)OHガッツ発起人・右腕役員、
(社)3.11震災孤児遺児文化スポーツ支援機構
常任理事

宮城県仙台市生まれ。東北大学卒業後、伊藤忠商事を経て、2000年、食品流通関連会社設立。10年、世界遺産奈良薬師寺内でレストランとギャラリーを運営する四縁を設立。震災後宮城に戻り、自身が漁師になるとともに新しい漁業を目指すOHガッツ設立。その活動は国内外から注目を集め、11年、『ニューズウィーク』日本版の「日本を救う中小企業100」に選出。被災地の産業復興、町づくり、教育支援活動も行っている。



チーム3
原 聖吾
マッキンゼー・アンド・カンパニー

東京大学医学部、スタンフォード大学経営大学院卒業。国立国際医療研究センター(国立国際医療センター:当時)を経て2007年に日本医療政策機構へ参画。生活習慣病、グローバルヘルス(国際保健)プロジェクトの立ち上げに携わる。現在マッキンゼー・アンド・カンパニー勤務。医師というバックグラウンドを活かしながら、様々なステークホルダーを巻き込んでの医療課題の解決に貢献すべく、政策立案、ビジネス、NPO/NGO活動など多岐に渡る領域での活動に取り組んでいる。



チーム4
岡島 悦子
株式会社プロノバ 代表取締役CEO

商社、外資系経営コンサルティング会社を経て、経営人材紹介サービス会社立上げに参画。2005年より代表取締役。2007年に独立し、「経営のプロ」創出のシンクタンクであるプロノバ設立、同代表取締役社長就任。ベンチャー企業、再生中の企業に対し、年間約100名の「経営のプロ」人材を紹介。経営チーム組成アドバイスや次世代経営者育成アドバイスなど、経営者のディスカッションパートナーとして豊富な実績を保有。

参加頂いた方々

提言アドバイザー(2/4)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と意思の共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム5
松古 樹美
野村ホールディングス
コーポレート・シティズンシップ推進室長
マネージングディレクター

上智大学法学部卒業。野村総合研究所入社。ニューヨーク大学およびジョージタウン大学にてロースクール法学修士号取得。ニューヨーク州弁護士。日本企業と、そこで働く日本人がグローバル化する手伝いがしたい、日本発の発信をしたい、とCSR活動の推進に取り組む。



チーム4
船橋 力
株式会社ウィル・シード ファウンダー兼
取締役会長
(学)河合塾 顧問

横浜生まれ、アルゼンチン、ブラジル育ち。上智大学卒業後、伊藤忠商事に入社。ジャカルタ地下鉄推進プロジェクトなどを手掛ける。また自ら異業種ネットワークを設立、各種イベントや勉強会を企画・運営、3年間で約3000名のネットワークに育てた。2000年に株式会社ウィル・シードを設立し、企業や学校教育現場に体感を重視した教育プログラム、海外派遣型研修などを提供。現在は河合塾にて日本人向け中高一貫の国際学校立ち上げ支援も行う。2009年世界経済フォーラム、ヤンググローバルリーダーに選出。



チーム6
荒井 優
公益財団法人東日本大震災復興支援財団
専務理事

昨年3月22日に孫社長と共に福島入りしたことがきっかけとなり、復興支援のための公益財団設立を担う。現在は、月の半分を福島で過ごす。早稲田大学在学中の1995年に第5回YOSAKOIソーラン祭りの実行委員長を務め、全国行脚を行う。その時に会った多くの仲間が今回の復興に関わっていることに勇気をもらっている。



チーム6
照屋 朋子 NGOゆいまーる 代表

大学時代、The Asian Law Students Association JAPANに所属し、日本代表としてワシントンDC、バンコク、イスタンブール等の国際会議に参加。貧困や社会問題について議論するだけでなく一点突破すべく、モンゴルに行き始める。上智大学法科大学院入学後、孤児院「太陽の子ども達」倒産の危機に際し休学し、NGO設立。開発コンサル会社にてJICA中国独占禁止法整備支援プロジェクトを担当した後、現在に至る。2011年、世界経済フォーラム「世界を変えるリーダー30人」に選出。

参加頂いた方々

提言アドバイザー(3/4)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と意思の共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム8
藤沢 久美
 シンクタンク・ソフィアバンク副代表
 社会起業家フォーラム副代表

NHK教育テレビ「21世紀ビジネス塾」のキャスターを3年間務め、その間、全国の中小企業やベンチャー企業の取材を行ってきた。その後も、様々なテレビ・ラジオ・雑誌等を通じて、800社を超える企業を取材。現在も、全国の元気な企業の経営者のインタビューと現場の取材を続け、メディアを通じて発信している。現在、マスメディアとネットメディアを結びつけることによる新しい社会的事業の育成「ソシオ・インキュベーション」の活動に取り組んでいる。



チーム7
籠島 康治
 株式会社電通ソーシャル・デザイン・エンジン/
 コピーライター

会社での広告制作のかたわら、ソーシャル・デザイン・エンジンの一員としてソーシャルなプロジェクトにクリエイターとして携わる。社外でもNGOとの協働でさまざまなコンテンツを発信する2025PROJECTの一員としてさまざまなプロジェクトで活動。九州大学、上智大学大学院非常勤講師、共著に「たりないピース」(宮崎あおい、宮崎将)「生き物たちへのラブレター」(滝川クリステル)「世界を変える仕事44」(Sweet Smile)など。



チーム8
藤田 華子
 群馬大学医学部医学科

東洋英和女学院高等部より、2001年から03年UWCSEA(シンガポール校)に留学。07年国際基督教大学教養学部理学科卒業。07年から10年ゴールドマンサックス証券に勤務。留学での経験や教育を、広い社会に還元したいという思いから、同証券会社を退職。10年4月より、群馬大学医学部医学科二年次へ編入し、現在に至る。医師免許取得後は、国際協力師になり発展途上国での医療に尽力することを目指す。

参加頂いた方々

提言アドバイザー(4/4)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と意思の共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム9

堀田 真代

ソフトバンク株式会社 社長室復興支援グループ

2004年、カリフォルニア大学サンタバーバラ校卒業、ソフトバンク入社。事業計画作成、投資、会社設立、売却、清算、新規事業の立ち上げ等に関わる。入社した年に日本テレコムとホークスの買収があり、2006年ボーダフォン買収には実務担当として参画。現在は、東北支援留学のプロジェクトを担当。米国大使館と協働で将来のグローバル人材の育成に奮闘中。

チーム10

松永 秀樹

国際協力機構エジプト事務所所長 兼
イエメン支所所長

1991年旧海外経済協力基金(現JICA)入社。本部、米国、スリランカ勤務を経て、2003年より2年間、国連開発計画(UNDP)イラク事務所に出向後、震災迄国際協力機構(JICA)中東二課長としてイラク戦後復興、パレスチナ中東和平支援に関与。東日本大震災発生後、NPO法人ジャパンプラットフォームに出向、岩手・福島チームリーダーとして、被災地支援に遠野を拠点に従事。2012年4月より、カイロに赴任、現職兼遠野まごころネット理事。



メディア掲載

新聞

「参加高校生を募集」
(2012年8月31日 東海新報)

「東北未来リーダーズサミット参加者募集」
(2012年8月31日 河北新報)

「サミットに参加を」
(2012年9月7日 三陸新報)

「東北未来リーダーズサミット2012参加高校生募集」
(2012年9月8日 岩手日報)

「東北の未来に提言を」
(2012年9月8日 福島民報)

「リーダーズサミット高校生募集」
(2012年9月12日 東海新報)

「東北の未来像を議論」
(2012年10月16日 岩手日報)

「東北の学生ら 未来を提言」
(2012年10月27日 読売新聞)

岩手日報 2012年(平成24年)10月16日(火曜日)

東北の未来像を議論

【盛岡支社】東北未来リーダーズサミットは14日(土)午後、盛岡市で開かれた。約300名が参加し、東北の未来像について議論した。

グループで話し合った東北の未来のための「提言」について発表する参加者さん(左から2人目)ら一席席・丸の内



盛岡の高校生、大学生ら約300人が、盛岡市で開かれた東北未来リーダーズサミットに参加し、東北の未来像について議論した。参加者は、東北の未来像について話し合い、提言を発表した。また、東北の未来像について話し合い、提言を発表した。また、東北の未来像について話し合い、提言を発表した。

参加高校生を募集

リーダーズサミット10月16日開催

東北未来リーダーズサミット2012参加高校生募集

サミットに参加を

東北の未来に提言を

東北の未来像を議論

東北の学生ら 未来を提言

2012年(平成24年)10月27日(土曜日) 夕刊 読売新聞

東北の学生ら 未来を提言

東北、被災地、被災した岩手、高城、福島の高校生らが集まり、東北について考える「東北未来リーダーズサミット」が、10月12日から3日間、東京都内で開かれました。被災地の若者を対象に教育事業を行っている「教育支援グローバル基金」の主催で、昨年に引き続き、2回目を迎えました。

参加者は、公募で選ばれた高校生60人と、大学生15人の計75人。10チームに分かれ、経営者や起業家ら各弊で活躍する社会人の助言のもと、「安全なまちづくり」「観光・地域活性化」などのテーマで、東北の未来への提言をまとめました。

最終日に行われた報告発表会で、各チームのメンバーは、提言の概要を説明し、質疑応答を行いました。

東北の未来に提言を

東北の未来像を議論

東北の学生ら 未来を提言

東北未来リーダーズサミット2012参加高校生募集

サミットに参加を

東北の未来に提言を

東北の未来像を議論

東北の学生ら 未来を提言

合唱

ハジマリノウタ～遠い空澄んで～

遠くに見えた街並み いつの日にか誓った景色と同じ
怯えて立てなくなっても 涙に滲む明日を教えてくれる

君からもらった言葉 僕の生きる意味を照らしてくれた
「もう少し強くなれたら…」なんて思ってみても仕方ないよ

「夢の途中」そう気付いたら なんだかちょっと楽になって
答えなど無くていいんだよ 僕の頬は少し朱に染まる

遠く見えた空は澄んでいて 泡沫の日々に迷わんとした
揺るぎないこの胸の真ん中の想いを託して 想いを信じて
僕はただ明日を見て歩こう たとえそこに願い届かずとも
変わらないあの日の言葉だけを この手に抱えて この手に抱えて

君とね 出逢ったことが見えなくなった場所を示してくれた
そうして解り合えたよ 僕も君も同じ弱さを持つてる

どうしてなんだ?みんな抱えてる怖さや不安を隠したりして
「強くない」ってそう言い切ったら 暗く濁った闇に灯り灯る

伝えたいことが溢れてきて あの空の向こうへ流れてゆく
ぎこちない言葉でしかないけど 今伝えたくて 今届けたくて

連綿とゆく時間の中で 僕は確かにここで呼吸(いき)をする
柔らかい陽の光を浴びれば また目を覚まして また歩き出せる

僕が生きた「証」を残そう それをいつの日か「夢」と名付けよう
つつましくも意味の在る「証」を 意味在る「夢」だと 確かな「夢」だと

僕は「今」を信じて歩こう たとえそこに祈り叶わずとも
生まれゆく全ての言葉たちを この手に抱えて この手に抱えて



協力団体

本プログラムは、ジャパン・ソサエティーの助成によって運営されています。ビヨンドトゥモローの事業は、多くの方々からのご支援によって支えられています。皆様のご支援・ご協力に、感謝申し上げます。



ビヨンドトゥモロー ストラテジック・パートナー

ビヨンドトゥモローの活動に1000万円相当以上のご寄付をいただいた企業・団体

- ジャパン・ソサエティー
- 武田薬品工業株式会社
- 米日カウンシル
- 三菱重工業株式会社
- ロート製薬株式会社

ビヨンドトゥモロー スカラーシップ・パートナー

奨学生枠の提供をいただいた教育機関・教育団体

- Leelanau School(米国・ミシガン州)
- Leysin American School (スイス・ヴォー州)
- St. George's School (スイス・ヴォー州)
- St. Michael's College (英国・ウスターシャー州)
- St. Timothy's School (米国・メリーランド州)

ビヨンドトゥモロー プロジェクト・パートナー

ビヨンドトゥモローの活動に100万円相当以上のご寄付をいただいた企業・団体

- 株式会社アルビオン
- 住友化学株式会社
- 公益財団法人 東日本大震災復興支援財団
- ポストン東北緊急支援ファンド

ビヨンドトゥモロー スカラーシップ・パトロン

ビヨンドトゥモロー・スカラーシップ・プログラムに奨学金枠をご寄付いただいた個人の方々

- 大塚 太郎様
- 小林 正忠様
- 本庄 竜介様
- ロバート・アラン・フェルドマン様

ビヨンドトゥモロー プロボノ・パートナー

ビヨンドトゥモローの活動に商品・サービスの形でご寄付・ご協力をいただいた企業・団体

- 株式会社アゴス・ジャパン
- あずさ監査法人
- 株式会社海外教育コンサルタンツ
- 株式会社ガリバーインターナショナル
- キンコーズ・ジャパン株式会社
- 全日本空輸株式会社

その他ご寄付をいただいた企業・団体の皆さま

- 香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部

この他にも、多くの方々にご支援・ご協力をいただいております。深く御礼申し上げます。
※上記は2012年度ご支援・ご協力頂いております皆様をご掲載させて頂いております。

BEYOND Tomorrow とは



概要

一般財団法人 教育支援グローバル基金は、政治・行政・企業・NGO・メディアなど多方面にて活躍するリーダーたちにより設立された財団法人です。「ビヨンドトゥモロー」は、東日本大震災で被災した若者がグローバルに活躍するリーダーへと成長することを支援することを目的とした事業として、包括的なリーダーシップ支援事業を実施しています。2011年9月には、「夏季ダボス会議ジュニア・リーダーズ・プログラム」、10月には「東北未来リーダーズサミット」、2012年8月には「TOMODACHI サマー2012 ビヨンドトゥモロー米国プログラム」を開催、被災地からリーダー候補を輩出するための取り組みを行っています。また、大学進学者を対象として奨学金及びリーダーシップ教育を提供する「ビヨンドトゥモロー・大学スカラーシップ・プログラム」や、高校生を対象として海外のボーディングスクールへの留学機会を提供する「高校留学プログラム」を運営しています。

特徴

志ある学生の夢の実現を応援し、金銭的な支援だけでなく対話を通して大志の実現を助け、グローバルな視野を持つ人材を育成します。また、今回の逆境を乗り越えて、自らがより主体的に社会に関わることができるような機会を提供することにより、他者に対する共感力をもつ人材の育成を目指します。

内容

1. 奨学金プログラム

東日本大震災という困難を経験した若者こそ、今後、世界や日本、そして東北復興のために行動するリーダーになる資質を有していると信じ、進学のための奨学金（返済不要）を給付しています。

 - 大学スカラーシップ・プログラム
 - 高校留学プログラム
2. リーダーシップ・プログラム

東北被災地からリーダーとしての活躍を志す学生たちの視野を広げ、人間的成長を促すリーダーシップ育成プログラムを開催しています。その領域は、世界・日本・地域へと広がり、広い視野と強い共感力をもって社会革新の原動力となる人材の輩出を目的としています。

組織体制

アドバイザー	竹中平蔵	慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所所長 総合政策学部教授	
	【理事】 (*共同代表理事)		
	浅尾慶一郎	衆議院議員	
	岡島悦子	株式会社プロノバ 代表取締役社長CEO	
	小林正忠	楽天株式会社 取締役常務執行役員	
	近藤正晃ジェームス*	Twitter Japan株式会社代表、一橋大学客員教授	
	佐藤輝英	株式会社ネットプライズドットコム 代表取締役社長 兼 グループCEO	
	高島宏平*	オイシックス株式会社 代表取締役社長、TABLE FOR TWO理事	
	坪内南	一般財団法人教育支援グローバル基金 事務局長	
	藤沢久美*	シンクタンク・ソフィアバンク副代表、社会起業家フォーラム副代表	
	船橋力*	株式会社 ウィル・シード ファウンダー 兼 取締役会長、 (学)河合塾 顧問	
	役員	堀主知ロバート	株式会社サイバード 代表取締役社長兼グループCEO
		牧原秀樹	前衆議院議員 弁護士・ニューヨーク州弁護士、 政策研究大学院大学客員研究員
		松古樹美	野村ホールディングス コーポレート・シティズンシップ推進室長 マネージングディレクター
		松崎みさ	株式会社アシモード 代表取締役、アガスタ ファウンダー
松田公太		参議院議員、タリーズコーヒージャパン創業者	
【監事】			
江崎滋恒		アンダーソン・毛利・友常法律事務所 弁護士	
【評議員】			
茅野みつる		カリフォルニア州弁護士	
土井香苗		弁護士、ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表	
宮城治男	NPO法人ETIC. 代表理事		
創設者会議 上記役員に加え、下記のメンバーが創設者会議メンバーとして、ビヨンドトゥモローを応援しています。	岩瀬大輔	ライフネット生命保険 代表取締役副社長	
	大塚拓	前衆議院議員、政策研究大学院大学客員研究員	
	齋藤ウィリアム浩幸	Intecur, K.K. 創業者兼最高経営責任者	
	堂前宣夫	株式会社ファーストリテイリング 上席執行役員	
	西山浩平	エレファントデザイン株式会社 代表取締役会長	
	古川元久	衆議院議員	
	山崎直子	宇宙飛行士	



一般財団法人 教育支援グローバル基金
<http://www.beyond-tomorrow.org/>

〒150-0041
東京都渋谷区神南1-5-7
APPLE OHMIビル5階 ETIC. 内
info@beyond-tomorrow.org

©一般財団法人 教育支援グローバル基金